

角川総一の 金融 逆さメガネ

ど この銀行へ行行って聞いてみてもいい。「原則として短期金利より長期金利の方が高いのが当然だと思いませんか」って。そうするとほとんど100人中100人が「そのとおりでしょ」と答える。本当か？

その理由について尋ねれば、おそらく多くの人は次のように答えるだろう。

「まず、預金する側から考えるね」という前置きに続いて「例えば1年定期に預けるより3年定期に預ける方が、より長期にわたってそのお金の使用権を相手に譲り渡すことになる。つまり支払う機

第5回

「金利は短期の方が低いのが常態」 は果たして本当に正しいか？

原則として、短期より長期の方が金利は高い——おそらく多くの人はそう思っている。しかし現実には、そんな常識を真つ向から否定する事象も少なくない。

ね」となるだろう。一方、これを受け入れる側から見ればどうか。

おそらく「預金を預かる側から見ても、1年定期より3年定期の方がより長期間それを使える。つまり使い勝手が良い。であれば、より高い利率を付与するのは当然だろう」となるはずだ。

以上の理屈はいずれも「流動性プレミアム説」と呼ばれるもの。つまり、流動性の欠如の度合いが大きければ大きいほど、その金融取引における利子は高くて当たり前、という理屈だ。ところが、現実を見る限り、こうした主張に真つ向から反対する（裏切る）事象が少なくない。

「年利12%の豪ドル建て外貨預金」の謎

「昨年夏以降、銀行業界で注目を集めた金融商品」と言えば、そのベスト3に入るだろうと思われるのが「高金利外貨預金」と言えば多くの人は「なんだ、ほらオーストラリアとかニュージーランドの高金利預金でしょ」とか「ああ

そう言えば、期間限定で通常の金利より高い金利で外貨預金を扱っている銀行が結構目立ったわね」と反応されるのではないか。実際私も、いくつかのマナー雑誌や女性誌から取材を受けた。

取材つてのは例えばこんなあんなだ。「いま一部の銀行が豪州ドル預金を年利12%なんて信じられないような利率で扱っているんですが、やはりそれなりに有利だと思っていいますか」「なぜこのような高い金利を出せるのですか」「やっぱり期間限定で外貨預金に一般の人の注目を集めるためですか」ってな具合だ。

しかし、少なくとも私のもとへ見えた3人ばかりの取材者は、どんなにも自ら進んで「この利率が有効である期間は何の程度ですか」とか「やはり期間が短いからこのような高い金利を出せるのですか」といった問い掛けをしようにとはなさらなかった。

そう、この商品のヒミツは「12%といった高金利が適用される期間はわずか1カ月」に過ぎないということである。つまり、「年利貸定期預金の金利を設定するに際しては、「多少高い金利を提示しても、その適用期間が短ければ実際に支払う利息の額は少なくていいんだから」というごく当然の考えが底流にある。

あるいは、われわれは給料日までの間、例えば3日だけお金を借りる場合、「多少金利が高くてもいいや。ただか3日分だけの利息を払えばすむのだから」と考えないだろうか。

これを逆に消費者金融会社の側から言うと「3日しか借りてくれないんだから、多少金利は高めにしなければ割に合わない」と、考えるに決まっているのだ。

さてどうでしょうか。今日を限り「金利は長期の方が高いのは当たり前」なんて当たり前じゃない固定観念から抜け出ませんか。

先述の例だと「年利12%の1カ月定期」なんてけちなことは言わずに、思い切って「年利52%」として大々的に売り出せばどうか。もちろんその心は「1週間定期」であることは言うまでもないのですが。

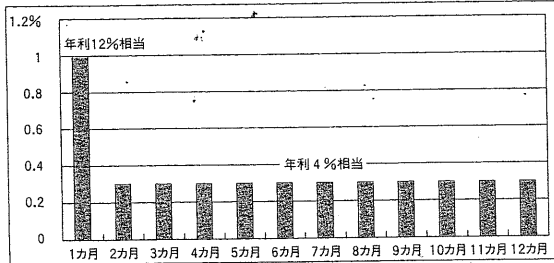
12%ではあるが、1カ月定期預金」なのだ。

商品開発の舞台裏を想像してみると……

この商品が登場した舞台裏は、さぞかし次のようなものだったのだろう。

「短期金利が実質的にゼロである状態は相当長く続きそうだが、この予想が支配的になってきた。つま

高金利豪ドル預金の利息構造（年利12%の1カ月定期）



「当面訴求力のある商品といえは外貨預金か」

「かといって、たとえ高金利の外貨預金をそのまま提示しても、顧客は見向いてくれないだろう。少なくとも今まで外貨預金に興味

がなかった人にも目を引くような意匠が必要だろうな」

「であれば、思い切った期間を短くする代わりに、普段扱っている金利より高い金利を付与すればどうか」

「あ、それいいね。それとその商品はキャンペーン期間中だけ取り扱うことで客の焦燥感を煽るか」

「まあ、当たらずと言えども遠からずだろうと思う。」

かくして登場したのが、次のような外貨預金だったのだ。すなわち「豪ドル建て外貨預金は年率12%、ユーロ建ては6%。いずれも

「多少高い金利でも短い期間なら……」

「ここでちょっと注釈が必要だろう。まず「自動継続」とは満期が来ても特別の意思表示をしない限り、その時点での利率でさらに同じ期間その契約（預金の預け入れ）が継続されるというもの。さらに「通常の金利」とはこのキャンペーン用に特別に設定した金利ではなく、一般の金利ということ。

昨年夏に遡ってみると、ここで言う通常金利とは「豪ドル1カ月物が4%程度、ユーロ1カ月物が0.5%程度」を指す。

さて、どうだろうか。ここでは「金利は長いものの方が高いのが当たり前」という常識は完全に吹っ飛んでしまわないだろうか？

逆に「金利は短いほうが高いのが当然」なのだ。

改めて考えてみよう。以上の外